フィールド風（現場）からの ㉜

宮田守男

地域課題に問いかけをする学びは 地域住民全員が求められる宿題だ

3月上旬、信州大学大学院地域社会イニシアティブ・コースで修了が認められた論文発表会が大学で開催され聴講する。直面する社会問題を考える貴重な場だ。

宮坂久美子さんの「外国人ヨメが語る地域社会定着ヒストリー」の研究。日本人と結婚し日本在住の結婚移住女性を対象に、社会構造の犠牲者のイメージから日本社会で貢献が期待される母・妻そして国際化の担い手としての課題を分析。特に母国語に注目し、自分の気持ちを一番語れる・伝えられる言葉は何なのか。学ぶ環境の必要性を論じた。「夢を何語で見たいのか」が大切な視点との助言が心に残る。

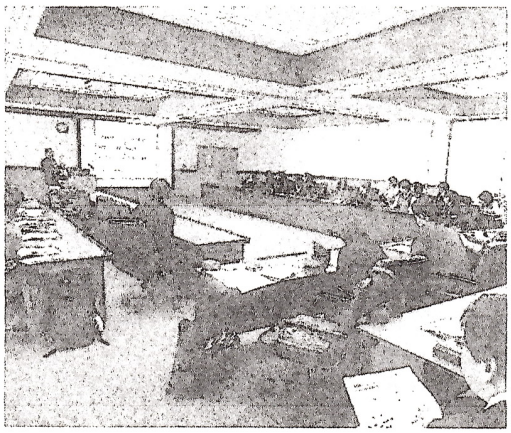
ロペス愛さんの「日系ブラジル人第2世代の進路選択とその社会的要因」の研究。日本の義務教育を受けて育った日系ブラジル人の移民第2世代の多くが、非正規雇用労働者としている現状について研究。第2世代が高等教育へ進学するためには、日本語支援者が必須であり、韓国ソウル市の先進的な取組みを例に、無償での各種支援と人材育成教育の必要性、また、いじめ・差別の実態も報告、地域コミュニティーが今後の地域課題だと論じた。

小松宏さんの「少子高齢化社会におけるローカル・ガバナンス」の研究。自ら自治体職員の職で大きな課題と感じる、急速な少子高齢化に伴う地域の担い手不足問題の解決策を研究。長期的視野で社会構造の変化を予想して、行政と地域住民の担う分野の配分が大切な視点で、全ての人が社会に関わる自発的な社会参加による市民総活躍社会の実現が必要と論じた。

小山勝宏さんの「火山大規模噴火とリスクコミュニケーション」の研究。火山大規模噴火を例に分析。ネット社会が今後更に進化しても、住民への周知は、住民が求める紙媒体などの潜在的なニーズは無視できないと論じた。

岩手日報のコラム風土計は、人間に三つのタイプがあり自分を第一に、与えるより多くを受け取ろうとする「テーカー」。相手を思いやり、受け取る以上に与える「ギバー」。その間にいる「マッチャー」。ビジネスで成功するのは誰か。テーカーは得するようで、恨みを買う。お人よしで損するが、「与える人」ギバーこそ信頼を集めて高い地位にいると紹介した。知識の高い人ほど相手に有利な取引をするという。修士論文研究で得た知識を、これからの人生に役立ってほしい。

（NPO法人信州地域社会フォーラム理事・白馬村森上）



大学院関係者・修了者・在校生の前での論文発表。体験者しか解らない貴重な経験だ